教育実践学研究第4号　2000．3

社会的事象とかかわりながら感性を生かし，問い続ける社会科学習の指導の在り方

麻生町立太田小学校教諭　栗原　秀雄
龍ヶ崎市立城西中学校教諭　奥谷　克二
茨城県教育研修センター指導主事　石島　光夫

1　はじめに

昨今の子どもの姿として，"いじめ，登校拒否など物質的な豊かさの裏に子どもの心の貧しさが指摘され，今日の教育的な問題の一つとして，子どもの「感性の不毛」が挙げられている。学校における教育活動を通して，生命や人権の尊重，正義感や遵法精神などを育成していても，非社会的な行動や反社会的な行動をとる子どもたちの姿が見られる。今まさに教科・領域の学習の中における心の教育の重要性が問われてきている。

第15次中央教育審議会答申では，"今後における教育の基本的な方向の中で，これからの変化の激しい社会にあって，子どもたちに必要な資質や能力を［生きる力］とし，［生きる力］を，自分で課題を見付け，自ら考え，自ら問題を解決していく力，理性的な判断や合理的な精神だけではなく，美しいものや自然に感動するといった柔らかな感性，たくましく生きるための健康と体力をその要素として挙げている。学校教育の中では，［生きる力］のこれらの要素を，知・徳・体と分け，知の部分は主に教科で，徳（感性）の部分は道徳・音楽・美術等で，体の部分は保健体育でというようにそれぞれの教科・領域の中で，この要素にあたる部分を育成し，その統合化を図ろうという考えが見られる。しかし，感性の育成は，道徳，美術，音楽といった限られた教科・領域によって育成されるものではないと考える。教科の学習指導は，教科の目標達成に向けて行われるが，児童生徒にとっては，学習活動を通して自己実現を図り，その過程で意欲，思考力，表現力，知識理解などとともに"美的感性，知的感性，人格的感性といった資質や能力も合わせて獲得していくものである。

社会科の学習においては，学習の結果として知識を獲得し理解を深めていくときに，単に事実や社会的事象の背景をとらえるというだけでは，社会科本来の目標を達成したとは言えない。知識として個人の尊厳や人間としての社会的な権利や義務について理解していても，それを日常生活の中で，自分なりに活かすことができなければ，社会科でいう学力が身に付いたとは言えないからである。そこで，子どもたちが社会的事象をささえる人，もの，ことにかかわる中で，自らの感性を生かし，問い続けることによって，実感や納得を伴う理解・認識を得，自分なりの社会的な見方や考え方を獲得できる社会科学習の指導の在り方を実践的に究明することにした。

2　研究の内容

(1) 感性のとらえ方

「感性」については，

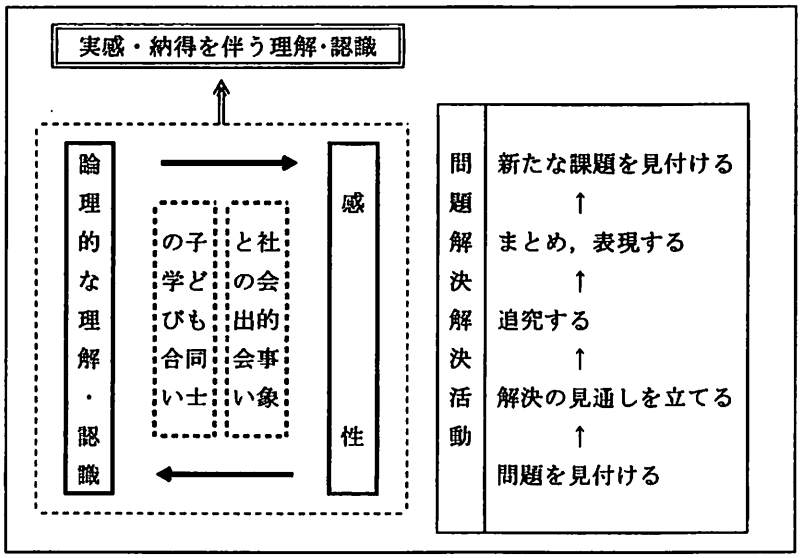
- ○ "刺激に応じて，感覚，知覚を生ずる感覚器官の感受性
- ○ "刺激から認知を経て感情に至る一連の流れ
- ○ "知能や思考や推理などとは違った分野，つまり外界の刺激を感じ取ってそれに心を動かされる状態
- ○ "周囲の環境からの刺激に対する感受性やそれに反応する心の動き
- ○ "価値あるものに気づく感覚

など様々な定義がある。

以上の定義を参考にして，本研究では，感性を次のようにとらえることにした。

社会的事象とのかかわりや子ども同士のかかわりを通して，子ども自らの感覚や感受性を基に，価値あるものを見いだし，思考や判断を繰り返しながら，自己をより高め，よりよいものにしていこうとする基になる力

また，社会科における問題解決的な学習を通して，子どもが社会的事象との出会いや子ども同士の学び合いの中で，実感・納得を伴う理解・認識を経る過程を次のように考えた。



そして，感性を生かしている子どもの姿を

- ○ 感受性と知的好奇心に満ち，事物・事象に対する鋭いアンテナが張り巡らされている。
- ○ 柔軟性としなやかな感覚をもっている。
- ○ 直観力と想像力に富んでいる。
- ○ 事物・事象に働きかけ，その反応を素直に受け止めることができる。
- ○ 何事にも自発的であり，自律的である。
- ○ ねばり強く問題解決に取り組み，納得あるいは実感をともなって分かるまで追究できる。
- ○ 他の人の思いや考えを尊重することができる。

のようにとらえた。

(2) 子どもが感性を生かし，問い続けていくための社会科学習指導改善の視点

社会科の学習において，子どもが感性を生かし，問い続けていくために，社会科においては次のような視点から，改善の方向を考えていくことにした。

○　社会的事実や社会的事象との出会いの中から，自分の問題を発見し，自分の思いや願いを生かしながら問題を解決していく過程を構成する。
○　児童生徒の五感が働く場面を学習指導の場の中に設定していく。
（直接的な体験や具体的な活動を取り入れた場の設定）
○　児童生徒の既成概念やイメージを突き崩す場，感情をゆさぶる場を学習指導の中に取り入れる。
○　子どもが多様な考えやイメージがもてるような場面を設定する。
○　子どもの考えたことや感じたことを表現できる場を設定する。
○　自分の描いたイメージや考えを友達同士互いに交換することによって，自分の考えやイメージを問い直し，練り上げる場を設定する。
○　教室内に支持的な雰囲気を作る。

(3) 社会科の研究主題に迫るために

小学校社会指導資料「新しい学力観に立つ社会科の学習指導の創造」の中では，[9]「子供自らが問題を見つけ追究できるようにするには，子供が社会的事象を自分自身や自分の生活とのかかわりから調べ，さまざまな疑問や問題意識をもって，それらの背景や理由，特色，様子など，社会的事象の意味を明らかにしようとする追究のエネルギーを醸成することが大切である」と述べている。

社会的事象の意味を明らかにしようとするエネルギーを醸成するためには，児童生徒が具体的な活動や体験的な活動を通して，五感を働かせながら社会的事象と出会い，社会的事象と自分とのかかわりを深められるようにすることが大切である。また，子どもが問題解決の方法や内容，手順などを自分なりに考え，問題追究をしていく中で，自分なりに社会的事象のもつ意味や価値をとらえていけるようにしていくことが必要である。自分なりの解決方法によって追究し，自分なりに納得できるあるいは実感として分かるという満足感や成就感が次の追究へ向けてのエネルギーになり，問い続ける子どもの姿になっていくと考える。

そこで，本研究主題「社会的事象とかかわりながら感性を生かし，問い続ける」子どもの姿を，「子どもが具体的な活動や体験的な活動を通して社会的事象と出会う中で，社会的事象と直接的にかかわり，自分の問題を発見し，自分なりに解決方法を考え，納得いくまで追究し続けること」ととらえた。

(4) 児童生徒の実態について

平成８年年度に，県内の児童388人，中学校生徒512人，小学校教師67人，中学校社会科担当教師54人を対象にして茨城県教育研修センターで意識実態調査をした結果を[10]参考として，児童生徒，教師の実態について分析する。

学習問題について「なるほど」「分かった」と思うときはどんなときですか。	児童生徒　(%)	
	小学生	中学生
ア　先生の話を聞いて調べ，まとめたとき	23.7	27.3
イ　教科書や資料集，副読本などで調べ，まとめたとき	30.7	35.2
ウ　作業したり見学したりして調べ，まとめたとき	14.7	14.1
エ　自分の考えや意見を聞いて調べ，まとめたとき	15.2	10.5
オ　グループで協力しながら調べ，まとめたとき	15.2	11.3
カ　その他	0.5	1.6

児童生徒が「納得して分かる」「実感として分かる」ために，どんな工夫をしていますか。	教師　(%)	
	小学校	中学校
ア　教師の話の内容や発問を工夫している	3.4	25.2
イ　教科書や資料集の活用の仕方を工夫している	13.6	18.4
ウ　作業的，体験的活動を取り入れるようにしている	54.4	25.8
エ　児童生徒同士の話し合いの場を設けるようにしている	15.2	15.3
オ　小集団の学習など学習形態を工夫している	13.4	15.3
カ　その他	0.0	0.0

「学習問題について『なるほど』『分かった』と思うとき」として，児童生徒は，「教科書や資料集などで調べ，まとめたとき」と回答した児童が30.7%，中学校生徒が35.2%ともっとも多かった。一方，「児童生徒が納得して分かる，実感として分かるためにどんな工夫をしているか」の問いに，「作業的，体験的な活動を取り入れるようにしている」と回答した小学校教師が54.4%，

中学校教師が25.8%でもっとも多く，この点で児童生徒と教師の意識に違いが見られる。

また，「児童生徒の社会的事象に対する直観的な感覚や感受性を生かし，社会的なものの見方や考え方を育てるためにはどのような工夫をしているか」の問いに，「社会的事象と自分とのかかわりをもたせるようにしている」と小学校教師の41.9%，中学校教師の24.3%が回答しており，もっとも多くなっている。

児童生徒の社会的事象に対する直観的な感覚や感受性を生かし，社会的なものの見方や考え方を育てるためにどんな工夫をしていますか。	教師 (%) (複数回答)	
	小学校	中学校
ア　単元レベルでの問題解決的な学習の展開を図る。	16.1	22.1
イ　作業的，体験的活動を取り入れる	18.0	18.9
ウ　社会的事象と自分とのかかわりをもたせるようにしている	41.9	24.3
エ　児童生徒のつぶやきや気づきを大切にしている	11.0	16.2
オ　児童生徒同士の話し合いの場を設けている	11.2	13.4
カ　児童生徒の表現や発表の場を設けている	11.2	13.4

児童生徒が，「なるほど」「分かった」と思うのは，教科書や資料集で調べてまとめたときが多い。実感として分かるという体験を多くの児童生徒が味わえるようにするには，体や心を通して，社会的事象とかかわり，今までの自分の社会的事象に対する意識や経験との共通点や相違点を感じ取れるような活動が大切ではないかと考える。

感性を育てるための工夫として，多くの教師が「社会的事象と自分とのかかわりをもたせたい」と考えている。問題解決的な学習の中で，児童生徒が社会的事象と自分とのかかわりをもちながら自分の問いをもち，自分なりに解決方法を模索しながら調べ，社会的な見方や考え方を獲得していけるようにしていく必要があると考える。

(5) 研究主題に迫る具体的な手だて

ア　社会的事象とかかわりながら感性を生かし問い続ける学習の場の構成

子どもが感性を生かし問い続けるために，指導計画や学習過程の中に次のような場を設定し，子どもの学習状況に応じて柔軟に対応できるようにした。

(ｱ) 体験的な活動を通して，社会的事象と出会い，自分とのかかわりを深め，子どもが内面から問いや願いをもつ。

(ｲ) 自分の問題の解決に向けて自分なりに方法を考え，解決の見通しをもって追究する。

(ｳ) 子ども同士がかかわり合う中で自分の考えやイメージを問い直し，自分の考えを深める。

(ｴ) 自分で調べた結果や考えたことを表現する。

(ｵ) 自分の学習の方法や学習した内容を振り返り，新たな自分の問題を明確にする。

イ　感性を触発し，問題意識を高める手だて

社会的事象との出会いの中で，子どもが自分とのかかわりを通して，自分なりの問いがもてるようにしたい。そのためには，社会的事象との出会いの中で，できるだけ体験的な活動や作業的活動を取り入れ，五感を通して直接的に事象とかかわり合えるようにする。また，社会的事象に対する今までの自分のイメージが覆されたり，深められたりすることによって，内面から問いを発し，切実性のある問題がとらえられるよう，資料提示の方法や活動の場を工夫する。

ウ　子ども同士がかかわり合って学習する場の工夫

問題解決の過程で，子ども同士がかかわり合う場を設定することによって，子ども一人一人の見方や考え方のよさを自分の中に組み入れることができるようにする。調べた結果や考えを子ども相互にやりとりすることによって，自分の考えを問い直し，社会的事象に対する自分なりのイメージや考えを深め，新たな問題が明確にとらえられるようにする。

３　授業研究の実践

【授業研究１】　小学校第６学年「長く続いた戦争」

(1) 授業の構想

「社会的事象とかかわりながら感性を生かし，問い続ける社会科学習の指導の在り方」という研究テーマに迫るためには，子どもが社会的事象との出会いの中で自分とのかかわりを深め，内面から問いをもち，それらの解決に向けて見通しをもってねばり強く追究し，自分なりに社会的な見方や考え方をもてるようにすることが大切である。

本単元においては，ワークシート形式の「学習の手引き」を作成し，子どもが単元全体の方向性を把握した上で学習活動を展開できるようにする。学習問題をつかむ段階では，教室に展示した戦争に関する遺物の写真パネルを単元の学習に入る数日前から観察したり，校外学習の一環として「江戸東京博物館」の見学を行ったり，戦争経験者の話を編集したＶＴＲを視聴したりする活動を通して問題意識の醸成を図る。このような活動をもとに，自分が調べてみたい事象を決定し，それを話合いで類型化してグループを編成すると同時に，学級全体で追究していく学習問題も作れるようにする。調べる・まとめる段階では，文献資料による追究だけではなく，同居している方や親戚の方で戦争経験のある方との交流を積極的に行うようにし，戦争という歴史的事象を様々な視点から多面的にとらえることができるようにする。そして，各自が追究した結果を類型化されたグループで検討し合い，各自の戦争に対する見方・考え方が練り上げられるようにする。同時に発表会用の資料としてまとめる方法も決定できるようにする。深める・広げる場面では，追究活動に協力をいただいた各家庭の戦争経験者を招待しての学習発表会を行い，最後に感想をいただく。そして最後に戦争に対する自分なりの見方や考え方を確認するために，「太平洋戦争の真実から平和な未来を考える」というテーマで作文を書き，本単元のまとめとしたい。

(2) 指導の手だて

ア　問題意識を高め，子どもが問い続けることができるようにするための工夫

(ｱ)　問題意識を醸成し，こだわりのある学習問題をつくれるようにする場の設定

子どもがこだわりや切実感をもって自分の追究を連続的に発展させていくためには，問題意識を醸成するプロセスが必要であると考える。本単元の学習に入る数日前から，教室に戦争に関する遺物の写真パネルを展示し，自由に観察できるようにする。さらに「江戸東京博物館」の見学，戦争経験者の話を編集したＶＴＲの視聴を行い，これらの活動を通して，気になったことや調べてみたいことを学習の手引きにメモしておくようする。次いで，各自が最も気になる事象を短冊に記入して黒板に貼付し類型化を図る。そして類型化された結果に基づいてグループを編成し，グループでの話合い活動を通して，追究活動を展開していく上でのポイントやねらいを決定し，各自が調べるための方向付けを図る。また，同時に学級全体で追究していく学習問題も作れるようにする。

(ｲ)　学習の手引きの作成

子どもたちが適切な学習方法を考え，単元全体の見通しをもちながら学習活動を展開できるようにするために，単元の学習計画に沿ったワークシート形式の学習の手引きを作成する。振り返る際にも有効に作用するように内容や形式を工夫する。

イ　感性を触発し，問題意識を高めるための手だて

(ｱ)　身近な存在である戦争経験者とのかかわり合い

本単元の特徴は，実際に戦争という歴史的事象の経験者が存在するという点である。この

点に着目し，身近な戦争経験者とのかかわり合いを通して，戦争という事象を多面的にそして主体的にとらえることができるようにする。また，学習発表会には追究活動の際に協力いただいた戦争経験者の方を招待し，自分たちが発表した内容に対する感想をいただくことにより，学習がさらに深まるようにする。

(イ) 子ども同士がかかわり合って学習する場の工夫

各自が追究した結果のポイントを規定の用紙にまとめ，それをもとに類型化されたグループで意見の交換を行うようにする。この話合い活動を通して，各自の戦争に対する見方・考え方がさらに練り上げられ，最終的にグループなりの見解が導き出せるようにする。同時に学習発表会用の資料としてまとめる方法も決定できるようにする。

ウ 自分なりの社会観をもち，新たな問題を見付けることができるような学習過程の工夫

(ア) 学習発表会における工夫

各グループの追究結果を表現するのに適切な方法で発表を行うが，その際に「発表視聴用レジュメ」を作成し，各グループの発表内容の概要を事前に把握した上で発表会に臨めるようにする。本資料には，「感想・考えたこと記入コーナー」を設け，発表を視聴しながらメモを取れるようにする。このことが，自分が調べたことだけでなく友達の調べた結果や考えに対しての自分なりの考えをもつことにつながり，まとめの段階で様々な視点からテーマ作文を書く上で，それが生かされると考える。

(イ) 学習のまとめをテーマ作文として表現する活動

追究結果の共有化を図った後の活動として，「戦争の事実から平和な未来を考える」というテーマで作文を書くようにする。この作文は文集として綴じ込み，各自の考えを確認できるようにする。このことにより，学習がさらに深まり，最終的には戦争という歴史的事象を事実や結果の累積としてとらえるのではなく，自分とのかかわりの中で感性というフィルターを通して主体的に見つめることができるようになると考える。

(3) 学習指導案

ア 単元名 長く続いた戦争

イ 学習計画 (12時間)

時	学習活動及び内容	評価項目
1 〜 2	・戦争の遺物のパネルや博物館の見学を通して興味や関心をもった事象を基にグループ編制を行い，グループのねらいや学級の学習問題などを設定する。	・グループのねらいや学級で追究していく学習問題を話合いを通して設定できたか。
3〜 5	・各家庭の戦争経験者とのかかわりなどを大切にしながらグループのねらいに沿った追究活動を行う。	・ねらいやポイントに沿った追究活動を展開できたか。
6 (本時)	・各自が調べてきたことを基に，グループでの意見交換会を開き，グループとしての見解を導き出す。	・各自の考えを基に話合い，グループの見解を出せたか。
7〜 9	・グループでまとめた見解を適切な方法で協力してまとめる。また発表視聴用資料の原稿を作成する。	・適切な方法で発表用資料や視聴資料原稿を作成できたか。
10〜 11	・各班の発表を行う。また，視聴する側は発表視聴用資料に考えや感想などを記入し意見交換を行う。	・堂々と発表したり，意見の交換などを行ったりできたか。
12	・これまでの学習をもとにテーマ作文を書く。	・作文することができたか。

ウ　本時の学習

(ｱ) 目　　標

・　グループで決定したねらいやポイントに基づいて各自が追究した結果を，話合い活動を通してグループの見解としてまとめ上げることができる。

・　学習発表会の際に使用する資料のタイプを決定することができる。

(ｲ) 展　　開

学　習　活　動	○　教師の支援・評価
1　本時の学習課題を確認する。 各自が調べてきたことをもとに話し合い，グループの見解としてまとめよう	○学級の学習問題を確認しておく。
2　グループごとに話合い活動を展開する。 １班→戦争中の武器や出来から学ぶ ２班→疎開をもっと知り隊聞き隊，調べ隊 ３班→戦争と人々追究チーム ４班→じっちゃん，真実教えてちょー隊 ５班→戦争中の生活追究隊 ６班→戦争生活比べたい	○個人の追究結果は事前にレジュメとしてまとめておき，本時に配付できるようにしておく。 ○話合いの際の司会役は事前に決めておく。さらに「司会の手引き」ができるように支援する。
(1)　各自の追究結果を発表し合う。 ◎追究結果を発表する ◎質疑応答を行う ◎追究結果をまとめる グループのメンバーの数だけ実施しよう。 ・追究結果をまとめるときは文章化するか，キーワード的にまとめよう。	○発表の時は，各自の追究結果を視聴する側が肯定的な態度で受け止めることができるような意識の醸成を図っておく。 ○発表する際は，追究した歴史的事象そのものを述べるだけではなく，その歴史的事象に関する自分なりの思いや考えまでも述べるように支援する。
(2)　各自の結論を基に検討を加え，グループでの見解としてまとめる。 ・グループのねらいやポイントに沿った内容かな。 ・様々な視点から追究されているかな。 ・学級全体で追究していく学級問題に合っているかな。	○話合い活動全体を通して，グループで決定したねらいやポイントからはずれて，歴史的事象の背景にいたずらに深入りすることのないよう，机間指導の際に助言を行うようにする。
(3)　学習発表会の際に使用する資料のタイプを決定する。 ◆ 壁新聞　◆ パンフレット ◆ 紙芝居　◆ 劇　化 ◆ ペープサート　◆ 複合型 ◆ ポスター　◆ 紹介ＶＴＲ ◆ 人形劇　◆ 絵　本 ◆ 個人新聞 などの中から適切なタイプを選択しよう。 ・グループでまとめたことを伝える上で適切な方法かな。 ・グループの人数を考えた場合，まとめることが可能な方法かな。 ・バックデータとなる資料とうまくかみ合う方法かな。	○発表会に使用する資料のタイプは，グループでの見解を伝える上で適切かつ有効と思われる方法を選択させたい。その際，これまでの各自の経験を生かして，話合いを進めることができるようにする。 (評) 各自が追究した結果を，話合い活動を通してグループの見解としてまとめることができたか。また，発表会に使用する適切な資料のタイプを決定することができたか。 (ワークシートへの記入状況・発表)
3　グループごとの話合い活動の結果を発表し合う。 (1)　グループのねらいやポイントに対応する見解について発表する。 (2)　学習発表会の際に使用する資料のタイプについて発表する。	○発表は各グループの代表者による発表とする。なお，代表者は事前に決めておくように話をしておく。 ○発表する際は，口頭での発表となるため，視聴する側がよくわかるように話し方や声の大きさなどに留意して発表できるようにする。
4　本時の学習のまとめと次時の学習活動について知る。 (1)　教師の講評を聞く。 (2)　学習発表会の予定や内容について知る。 (3)　その他	○学習発表会当日には，本小単元の学習にかかわってくれた人たちで都合のつく方を教室に招待することを知らせ，学習意欲を高揚させる。

(4) 授業の考察

ア　問題意識を高め，子どもが問い続けることができるようにするための工夫

(ｱ)　問題意識を醸成し，こだわりのある学習問題をつくれるようにする場の設定

戦争に関する事象や記録などの観察や視聴を通して，子どもたちは様々な疑問をいだくことができた。戦争に関する遺物の写真の観察から始まり，博物館での見学，そして戦争経験談を編集したＶＴＲの視聴，同時に自己の初発の追究活動が裏側で展開され，次第に疑問が明らかになっていく過程で子どもたちの問題意識は醸成されていった。そして，疑問の状態から「調べずにはいられない」という切実性を帯びた学習問題へと深化していった。次に，全員の学習問題を話合いを通して類型化し，同じような学習問題をつくった子ども同士でグループを編成した。また，学級全体で追究していく学習問題も設定したため，グループ及び各自の学習活動の方向性が明確化され，追究への意欲が更に高まったと考える。

(ｲ)　学習の手引きの活用

書き込み式の冊子形態にしたので，子どもたちは学習活動を見通しをもって進めることができた。また，学習の流れを振り返って確認することも可能であるため，様々な学習場面で有効に活用していた。

イ　感性を触発し，問題意識を高めるための手だて

(ｱ)　身近な存在である戦争経験者とのかかわり合い

学級のほとんどの家庭に戦争経験者が同居しているという点に着目し，追究活動を行う上で協力をしていただいた。自分の肉親が熱い眼差しで語る歴史的事実は，文献資料からは得られないリアルで衝撃的なものであり，子どもたちの感性は大いに揺さぶられたようである。これまで，客観的に見ていた歴史的事象を主体的にとらえることが可能となり，過去の出来事を基に現在の自分の生き方にまで迫ることができたようである。

(ｲ)　子ども同士がかかわり合って学習する場の工夫

各自が追究してきた結果を類型化したグループで話し合った。実際に祖父の軍服を資料に用いて発表したり，経験談をテープに録音して聞かせたりしていた子どもも見られた。同様の学習問題を追究しても結果が違っている場合もあり，しかもそのどれもが事実に基づいているため，多面的に考え，判断しまとめるという活動を真剣に行うことができた。

グループでの意見交換会

ウ　自分なりの社会観をもち新たな問題を見付けることができるような学習過程の工夫

(ｱ)　学習発表会における工夫

子どもたちは「発表視聴用レジュメ」を参考にしながら，友達の発表を真剣に視聴していた。レジュメの中の「感想・考えたこと記入コーナー」には，友達の発表についての感想などが記入され，まとめの段階におけるテーマ作文を書く上で大変参考になったようである。また，意見の交換も活発に行われ，戦争という歴史的事象に対する一人一人の見方や考え方がさらに深まったと考える。また，発表会当日には，追究活動に協力いただいた各家庭の戦争経験のある方を招待し，発表内容に対する

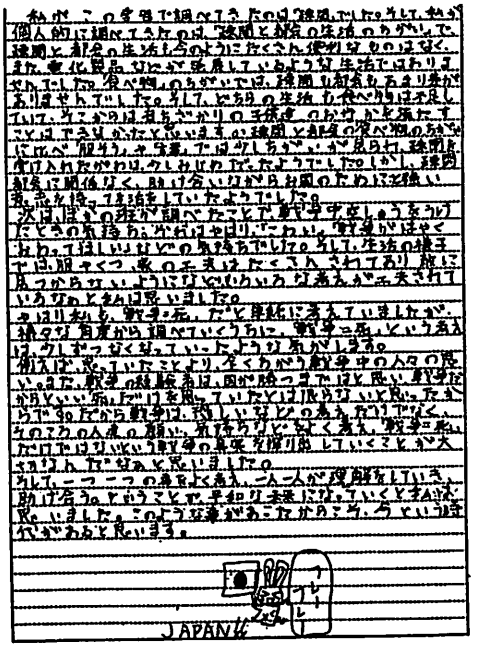
劇化と紙芝居での発表

感想を述べていただいた。「今の子どもたちがこのような勉強を一生懸命してくれているのがよく分かり，涙が出るほどうれしいです。当時のことが頭の中に昨日のことのように浮かんできました。戦争中は無我夢中で一日一日を精一杯生きていたことが思い出されます。」などの言葉を聞き，子どもたちの感性は，再び触発されたようであった。

(イ) 学習のまとめをテーマ作文として表現する活動

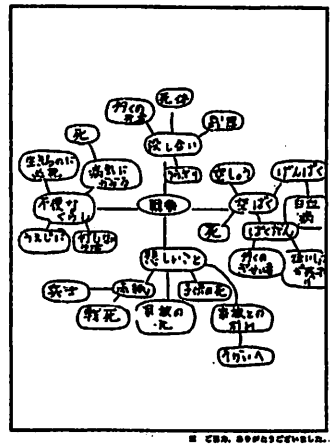
学習のまとめの活動として実施したテーマ作文は，子どもたち一人一人の戦争に対する考えの深まりを確認する上で有効であった。資料１で取り上げたＡ子は学習計画を作成するための意識・実態調査の段階では「戦争＝原爆＝死」と単純にとらえていた。しかし，学習を進めて行く中で戦争の様々な背景を理解した上で当時の人々の思いや願いを自分なりにつかみ，苦しい生活条件の中でも当時の人々が工夫をして逞しく生活していたことや，疎開をした子どもたちの強い心に共感し，現在の自分と比較しながら戦争について考えることができたようである。また，追究する際は事象を多面的に見ることの大切さを痛感しており，学び方という点においても成長の跡がうかがえる。

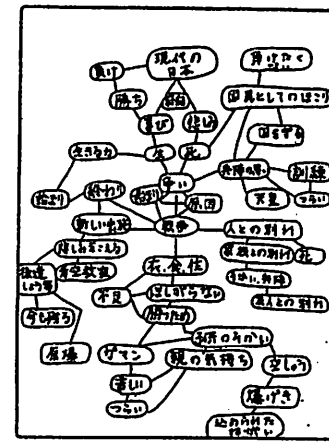
資料１　Ａ子の作文


私がこの学習で調べてきたのは疎開でした。そして私が個人的に調べてきたのは，疎開と都会の生活のちがいで，疎開と都会の生活もこのようにたくさん使利なものはなく，また，電化製品などが発展しているような生活ではありませんでした。食べ物のちがいでは，疎開も都会もあまり差がありませんでした。そして，どちらの生活も食べものは不足していて，そこからは自給自足の工夫等のかがやかを強たすことは，できなかったと思います。疎開と都会の食べ物のちがいに比べ服そうは，全然，ていどちがうことが思われ，疎開者，受け入れたがわは，クしゅびゅうでしたようでしたが，しかし，疎開都会に関係なく，助け合いながら日本国のために強い気，あるい持ちを持っていたようでした。
次は，ぼくの班が調べたことで，戦争中空しょうをうけたときの気持ち，かれはやはり，たくさん，戦争がはやく，なくてほしいなどの気持ちでした。そして，生活の様子では，服そくつ，食のそえたくさん，さわっており，服に，見つからない，ようにけっぱいろいろなあんがえ，考えていろいろあると，思いました。
ぼくは，私も，戦争を，だと，単純に考えていましたが，様々な，角度から，調べていくうちに，戦争，悪いという考えは，少しずつ，なくなっていったような，気がします。
例えば，思っていたことより，そくちが，戦争中の人々の思い。また，戦争の結果，あれは，国が，勝つ，ためでは，悪い，戦争だから，いい，悪いだけを，思っていたのは，間ちがいだと，思いました。
だから，戦争は，悪いなどのあるだけでなく，その，ころの人達の，願い，気持ちなども，ちゃんと，考え，戦争，悪いだけではいけないという，戦争の，真実を，掘り，出していくことが，大切だと，思いました。
そして，一つ一つの，事を，よく，考え，一人一人が，理解をしていき，助け合う，ということ，や，平和，に，なっていくと，思いました。このような，学習が，あったから，こそ，という，学び，があると，思います。
JAPAN

このように，歴史的な遺物や人物と五感を通してかかわりながら追究できるよう場の設定を工夫することにより，子どもは，単に歴史的事実を理解するだけでなく，当時の歴史的背景を考え，当時の人間の生き方に自分の姿を重ね合わせ，歴史的事象のもつ意味や価値について，実感や納得を伴う理解ができるようになったと考える。

資料２　Ｂ男のイメージマップの変化





(5) 授業の考察

ア　生徒が自ら問題を見つけ見通しをもつことができるようにする工夫

(ア) 生徒の感性を生かした学習問題づくり

「龍ケ崎のよさと問題点」というテーマで，これまで学習してきたことや生活経験の中から感じていることを自由に出し合い，意見交換を行った。生徒から出た意見をイメージマップのように関連付けながら構造的に板書し，その関連性を考えがながらまとめ，観点を絞り込んでいった。生徒は，「よさ」よりも「問題点」を指摘することが多かったが，「観光地がない」という意見に対して「牛久沼は観光地かもしれない」というように違う視点を与えながら，「よさ」に気づくように配慮していった。その結果，「龍ケ崎の伝統・文化」コースと「牛久沼の魅力」コースが設定された。

そして，歴史・伝統文化・環境・変化などの視点を整理し，追究グループを編成し，個別の学習相談を通して，学習問題や調べる内容，方法を検討していった。学習相談では，生徒が学習問題に対してもっているイメージを突き崩したり，分かっていることと分からないことをはっきりさせたりすることができるようにアドバイスを行った。自己評価には，「学習相談で調べることや調べ方がはっきりしてきた。」というような感想が多く見られた。

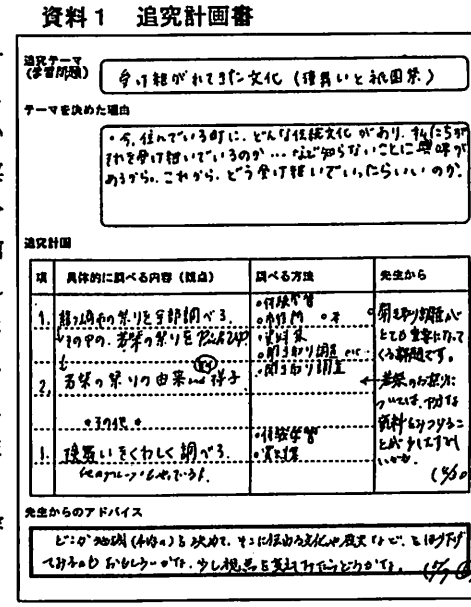
これらのことから，学習問題の設定にあたっては，十分に生徒とかかわり，適切な方向付けをすることが大切であり，明確な見通しをもつことが，生徒の追究意欲を高め持続することにつながることが分かった。

(イ) 追究計画検討会

資料１のような追究計画書を作成し，追究計画検討会を行った。生徒たちは，自分の調べようとしている内容や方法を具体的に発表し合い意見交換を進めていった。授業の中では，「実際に関係している人に話を聞きたい」，「自分たちで見に行ってみよう」，「歴史民俗資料館や図書館を活用しよう」「他地域との比較をしてみるとよいだろう」など建設的な意見が出された。また，学習カードには「インターネットを使ってみたい」，「アンケート調査をすることにした」というような感想も見られ，深まりのある検討会になった。

このように追究計画作成の段階に調べる内容や方法，まとめ方などを交流する場を意図的設定することは，生徒が自分たちの計画を見し，より明確な追究の見通しをもつ上で非常に有効であったと考える。

資料１　追究計画書


追究テーマ（学習問題）　受け継がれてきた文化（祇園祭）

テーマを決めた理由

・今，住んでいる町に，どんな伝統文化があり，私たちがそれを受け継いでいるのか…など知らないことに興味があるから，これから，どう受け継いでいったらいいのか。

追究計画

項	具体的に調べる内容（観点）	調べる方法	先生から
1.	祭り周辺の祭りを学習調べる。その中の，若柳の祭りを学習する。	・体験学習 ・本 ・インターネット ・実際に見る ・聞き取り調査	聞き取り調査が中心となり重要になってくる課題です。
2.	若柳の祭りの由来と様子	・聞き取り調査	←若柳の祭りについては，多くの資料を入手することが少し工夫すればいいです。
1.	現在いきくわしく調べる。（ケーブルテレビ）	・相談学習 ・実地調査	

先生からのアドバイス

どこが地域（4校）を決めて，さらに深める文化や歴史などで，もっと絞り込めるのおもしろいテーマだな。少し視点を変えてみてもいいかもな。

イ　追究活動を通して自分なりの見方や考え方をもつことができるようにする工夫

(ア) 多様な方法による資料の収集と分類整理の活動

一つの資料に頼りがちな生徒の実態から，追究活動の前半に資料収集の時間を設定した。あらかじめ関係ありそうな資料をできるだけ収集し，資料の内容を吟味しながら取捨選択していった。学校の図書室だけでは文献資料が十分に集まらないので，市立図書館や歴史民俗

【授業研究２】中学校第３学年選択教科（社会）「わたしたちの住む町龍ケ崎」

(1) 授業の構想

「社会的事象とかかわりながら感性を生かし，問い続ける社会科学習の指導の在り方」という本研究のねらいに迫るためには，生徒が社会的事象と直接的にかかわる中で，自分の問題を見つけ，見通しをもって追究し，自分なりの見方や考え方をもつことができるような学習を展開することが大切と考える。

選択教科の社会（以下選択社会）においては，生徒が自ら問題を設定し，追究計画を作成する。そして，これまでの学習経験を生かしながら多様な方法で追究し，その結果や方法を交流し合いながら自分なりの見方や考え方を深めることができるように授業を展開する。問題設定の段階では，学習相談の場を設け，生徒の興味・関心を大切にしながら追究の方向付けを行い，問題解決の見通しがもてるようにする。また，追究計画を検討する場を設定し，追究の方法を交流し合い，計画の修正ができるようにする。追究の段階では，市立図書館や歴史民俗資料館の活用，インターネットの活用の場を設定し，広く情報を収集できるようにしたい。また，中間発表会を位置づけ，その中でゲストティーチャーから話を聞いたり，生徒同士が互いに情報交換したりする場を設定し，生徒一人一人が自分なりの見方や考え方を深められるようにする。さらに，新たな疑問や課題を基に再追究活動を位置づける。まとめの段階では，グループごとに新聞を作成し，学習の成果を発表し合う。また，これからの地域へのかかわり方について意見交換を行い，地域社会の中で貢献していこうとする意欲と態度を育てていきたい。

(2) 主題に迫る手立て

ア　生徒が自ら問題を見つけ見通しをもつことができるようにする工夫

(ｱ) 生徒の感性を生かした学習問題づくり

「龍ケ崎の伝統・文化」をキーワードとして既習事項や生活経験を基に意見交換を行い，興味・関心のあることを自由にリストアップする。それを類型化し，コースを設定する。さらに，観点ごとに追究グループを編成し，グループで話し合い，学習問題をつくりあげていくようにする。その過程に，教師と各グループとの学習相談の場を設定し，生徒の地域に対するイメージや思いを揺さぶりながら，一人一人の思いやこだわりを大切にした学習問題ができるように支援する。

(ｲ) 追究計画の検討

自分たちの学習問題を解決していくための方法や追究の見通しを追究計画書に表し，追究計画を発表し合う場を設定する。その中で，友達からアドバイスを受けたり，他のグループの追究の方法を参考にしたりしながら計画の検討・修正を行い，学習問題解決の見通しがもてるようにする。

イ　追究活動を通して自分なりの見方や考え方をもつことができるようにする工夫

(ｱ) 多様な方法による資料の収集と分類，整理

生徒が主体的に問題解決に取り組むためには，生徒自身が多様な方法で資料や情報を収集することが必要であると考える。そこで，追究活動の前半に資料の収集，整理を行う場を設定し，自分たちの追究テーマに関する資料をできるだけ多く集める。そして，必要なものとそうでないものに分類，整理する。資料収集においては，市立図書館や歴史民俗資料館の活用，インターネットの活用，聞き取り調査，アンケート調査など，多様な方法で収集できるように支援する。

(イ) 自分の考えを問い直す場の工夫

追究活動の中に中間発表会を位置づけ，自分なりの見方や考え方，追究の方法などを見直す場を設定する。それぞれの追究内容を関連付けられるようなテーマを設定し，提案発表とゲストティーチャーを交えた意見交換を行う。その中で，自分なりの考えを発表したり，ゲストティーチャーの話と自分たちが調べたことを関連付けたり，あるいは総合させたりしながら，自分の考えを問い直し，地域社会に対する見方や考え方を深められるようにする。また，ゲストティーチャーの話から調べたことと現実との違いに気づき，新たな疑問や課題をもてるようにしたい。

(ウ) 学習を広げる再追究活動の工夫

他のグループの発表やゲストティーチャーとの意見交換の中で感じた疑問や課題を基に再追究する場を設定する。その中で，新たな資料を収集したり，体験的な活動を取り入れたりしながら，自分とのかかわりで追究を深めることができるようにしていきたい。

(3) 学習計画

月	週	過程	学習活動	個に応じた支援と評価
4	4	ｶﾞｲﾀﾞﾝｽ	1　選択社会の学習のねらいや学習の仕方，内容について知る。	・一人一人の興味・関心を大切にし，学習意欲を高められるようにする。
5	1 2	課題設定	1　これまで学習してきた知識をもとに龍ケ崎について話し合う。 2　コース選択を行う。 3　コースごとに図書室の資料などを活用した「概略調べ」を行い，コースの学習問題をつくる。 4　コース内で話し合い，グループとグループの課題を決定する。	・話合いを通して，龍ケ崎の歴史や文化のどの部分に興味があるのかが明確になるように配慮し，個別に援助する。 ・課題の決定にあたってはグループ面談を行い，方向づけを援助していく。 (評) 自己の興味・関心に基づき主体的に課題の設定ができる。 (観察，発言分析)
	3 4	計画作成	1　課題を吟味し，課題を設定した理由，調べる内容や方法を検討する。 2　追究計画書を作成する。 3　追究計画検討会を行う。	・生徒の特性を生かした追究計画や調査計画が立てられるように援助する。 ・自分とのかかわりを意識した追究計画になるように援助する。 (評) 追究の見通しをもつことができる。 (発表，作品分析)
6	1 2 3 4	追究活動	「龍ケ崎の伝統・文化」　「牛久沼の魅力」 1　資料の収集を行う。 ・聞き取り調査（アンケート実施） ・実地調査（牛久沼の現状など） ・見学調査（歴史民俗資料館） ・インターネットでの資料収集 ・訪問調査（写真家，撞舞）　など ・文献の活用（図書室，市立図書館） 2　グループの追究計画に従って課題解決に取り組む。 (例) ・江戸時代の龍ケ崎　・牛久沼の開発の歴史 ・明治時代の龍ケ崎　・カッパの伝説 ・龍ケ崎に残る遺跡　・小川芋銭と牛久沼 ・都市開発と発展の様子　・牛久沼の環境 ・未来の龍ケ崎　・牛久沼と周辺の人々の暮らし ・撞舞祇園祭　など ・地域に残る伝統文化 など	・追究計画に基づき追究活動が滞り無く進められるように，適時グループごとに助言を与えるようにする。 ・見学，調査などの体験的な活動が積極的に行えるようにする。 ・図書室のインターネットを活用して資料収集ができるようにする。 ・グループ単位で校外での学習が進められるように，教師の分担を工夫し，適切なかかわりができるように配慮する。 (評) 多様な方法で資料を収集したり，進んで体験的な活動に取り組むことができる。(観察，自己評価，作品分析) ・訪問調査や聞き取り調査の連絡の取り方，対応の仕方を十分に指導する。 ・追究計画の検討や修正が随時できるように，援助する。
7	1 2 (本時) 3		3　中間発表会を開く。 ・これまでの追究で分かったこと，考えたこと，課題となっていることなどを発表し合う。 ・ゲストティーチャーを招聘し，意見交換をする。 ・今後の追究計画を修正する。 4　再追究を行う。 ・ゲストティーチャーを招聘したり，訪問調査を行ったりして，残された課題の解決や発展的な追究をする。	(評) 自己の課題解決に向けて，主体的に追究活動に取り組み，龍ケ崎の歴史や文化，諸問題について考えることができる。　(観察，作品分析) ・調べて分かったことと分からなかったことを明確にとらえられるようにする。 (評) 分かりやすく発表できる。(発表) ・人材バンクを活用し，ゲストティーチャー招聘の準備をする。 (写真家，撞舞，歴史研究家　など) (評) 自分なりの見方や考え方に広まりや深まりが見られる。(感想，作品分析)

9	1	まとめ	1　調べた内容を整理し，新聞にまとめる。	・新聞の例を提示し，分かりやすくまとめることができるように援助する。
	2		2　発表資料を作成する。	・発表方法を工夫し，多様な表現活動ができるように配慮する。
	3	発表	3　全体発表会を行う。 ・追究内容の報告をする。 ・意見交換をする。 テーマ：「守ってきたもの，守っていくもの」	(評) 調べて分かったことや考えたことを工夫して分かりやすく伝えることができる。（観察） (評) 龍ケ崎の歴史や伝統・文化を自分たちの生活とのかかわりで見直すことができる。（発表，作品分析）
	4		4　調べたことの要旨をまとめ，ホームページに掲載する準備をする。 5　自己評価をする。	・今後の地域生活に主体的に取り組む意欲がもてるようにする。

(4)　指導案

学　習　活　動	教師の働きかけと評価
1　本時のめあてと学習の流れを確認する。 龍ケ崎のよさを再発見しよう	T1 ・これまでの学習活動を賞賛しながら，本時のめあてをとらえられるようにしていく。 T2 ・計画表，めあてを掲示する。 ・ゲストティーチャーを紹介する。 (評) 本時の活動を知り，各自の追究活動の過程に位置づけることができる。 ＜観察（関心・意欲）＞
2　調べた方法や内容について３グループが発表する。 (1)「牛久沼の歴史」 ・牛久沼と周辺地域の変化 ・牛久沼を取りまく文化 (2)「獅舞」 ・獅舞の由来，様子 (3)「伝説の原　女化」 ・女化神社 ・女化の伝説	※自分の調べた内容と比べたり関連づけたりしながら発表を聞くことができるように助言する。 ・調べた内容や事実ばかりでなく，調べ方やまとめ方も参考にするように助言する。 ・発表の分担，資料の提示の仕方や資料の準備を確認し発表がスムーズに行えるように援助する。 ・発表内容についてよいところを賞賛したり，補足したりする。 (評) 自分たちが追究したことを，資料や提示方法を工夫して分かりやすく伝えることができる。 ＜発表（技能・表現）＞
3　２つのコースに分かれ，ゲストティーチャーを交えて意見交換をする。 ゲストティーチャー 郷土史研究家　鈴木氏 牛久沼漁業組合長　大野氏 キーワード：「守る」 (質問，意見交換の視点) 「龍ケ崎の伝統・文化コース」 ・獅舞と祇園祭　・地域に伝わる伝統行事 ・女化に伝わる文化　・開発と変化 ・中世の龍ケ崎 「牛久沼の魅力コース」 ・牛久沼の歴史や文化　・牛久沼の変化 ・牛久沼の自然と環境 進め方 司会（生徒） はじめのことば グループ報告 質問と意見交換 ゲストのお話 おわりのことば 場の構成 黒　板 牛久沼コース　龍ケ崎の伝統文化コース	・龍ケ崎の郷土史に造詣が深い鈴木氏，漁業に従事しながら牛久沼を守り続けてきた大野氏の２名をゲストティーチャーとして招聘し，生徒の質問に答える形式で助言していただく。 ・コース内での意見交換の進め方，予想される質問事項などについて，ゲストティーチャーと事前に打ち合わせをしておく。 ・Ｔ１（牛久沼の魅力コース），Ｔ２（龍ケ崎の伝統・文化コース）がそれぞれのコースを担当し，意見交換がスムーズに展開できるように支援する。 ・質問事項については，事前に追究グループで話し合い，視点を明確にしておくようにする。 ・新たな気づき，調べたこととのつながり，自分とのかかわりで考えていくように助言し，大切なことはメモをとるように指示する。 牛久沼の魅力コース ※カッパの伝説や牛久沼に伝わる話，小川芋銭について調べてきたことを生かしながら，将来に向けて牛久沼の自然や環境を守っていくことの大切さに気づかせるようにしたい。 龍ケ崎の伝統・文化コース ※龍ケ崎に伝わる祭りや地域の行事，伝説と現在の開発の様子などを対比させ，変わらないものと変わっていくものに気づかせるようにしたい。 ・意見交換においては，単なる事実の確認にとどまることがないように「守る」というキーワードを意識させ，事実の裏側にある人々の努力や思い，願いなどに気づかせていきたい。
4　本時の学習を通して気づいたこと，考えたことをまとめ，今後の追究活動の見通しを確認する。 (1) ワークシートにまとめる (2) 追究グループで今後の見通しを確認する	(評) 地域の歴史や伝統・文化について自分なりの見方や考え方を深めることができる。 ＜発言，ワークシート（思考・判断）＞ ・自分の調べたことと関連づけて，さまざまな視点から自分の考えを問い直し，深めている。 →賞賛し，その考えを紹介する。 ・自分の調べたことと比較し，その違いや共通性に気づいている。 →自分の考えを見直すために生かしていくように助言する。 ・新たな事実に気づいている。 →自分の調べたことや考えと比較する視点を与える。 ※今後の追究計画の修正については，生徒のこだわりを大切にして適切な助言を与えるように努める。
5　自己評価を行い，次時の学習活動を知る。	

資料館に移動して学習する時間も位置づけた。また，家の人や近所の人への聞き取り調査やアンケート調査を通して資料を作成したり，インターネットでホームページを閲覧したりしながら資料の収集に取り組んだ。そして，資料を収集した後，追究テーマや内容と照らし合わせながら資料の分類，整理を行った。その活動の中で，解決の見通しがもてたことも主体的な問題解決につながったように思う。

(ｲ) 自分の考えを問い直す場の工夫

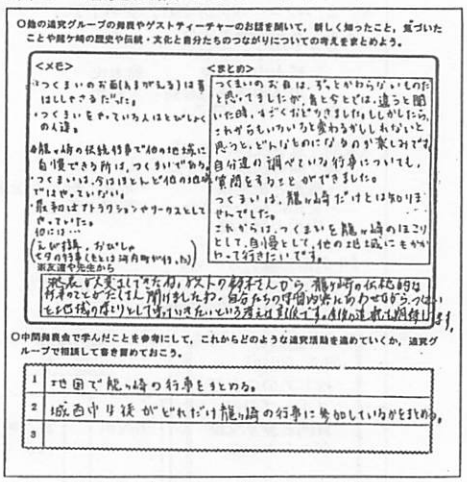
自分の考えを問い直すことができるように中間発表会を位置づけた。中間発表会には，龍ケ崎の郷土史研究家の方と牛久沼漁業組合長の方の２人を招聘し，生徒たちとの意見交換や質問に答えていただいた。

中間発表会の様子

発表会では，昔の龍ケ崎の様子や祭り，撞舞の歴史や現状，牛久沼の変化や今後の開発などについて多くの話を聞くことができた。生徒たちは，自分たちの調べの不十分さに気づいたり，新たな疑問をもったりしながら真剣に話を聞き，地域社会を守り育てていくための自分たちの考えを十分に問い直していた。

このように，提案発表やゲストティーチャーを交えた意見交換を通して，いろいろな考えにふれることで，生徒は，自分たちの住んでいる龍ケ崎に対する自分なりの見方や考え方を深めていくことができた。また，実際に携わっている人から生きた話を聞くことは，生徒の心を刺激し，自分の考えを問い直すことにつながることを改めて確認できた。

資料２　意見交換でのワークシート



○龍の追究グループの発表やゲストティーチャーのお話を聞いて，新しく知ったこと，気づいたことや龍ケ崎の歴史や伝統・文化と自分たちのつながりについての考えをまとめよう。

<メモ>

・つくまいのお面(人形がしゃべる)は面白くてしゃべるだった。
・つくまいをやっている人はとてもしんどいの人達。
・龍ヶ崎の伝統行事で他の地域に自慢できる所は，つくまいであり，つくまいは，今はほとんど他の地域ではやっていない。
・最初はオトラクションやゲーム としてやっていた。
他には…
(えび踊り，かぶし，モダンの踊り(あれは浦町やけ，ね)
家族達や先生から

<まとめ>

つくまいのお面は，なんとなくわからないものと思っていましたが，自分の今までは，違うと聞いた時，すごくがっかりさせられましたが，これからもいろいろと変わるかもしれないと思うと，どんなものに変わるのかが楽しみです。自分達の調べという行事についても，質問をすることができました。
つくまいは，龍ヶ崎だけとは知りませんでした。
これからは，つくまいを龍ヶ崎のほこりとして，自慢として，他の地域にもやっていき行きたいです。

楽しんで人達として，ゲストの方々から，龍ヶ崎の伝統的な行事のことが少しは，聞けましたわ，自分たちの学習内容に合わせながら，つないもとの形の作りとして，作っていきたいという考えは，素晴らしく，自分の意欲が，伝わりました。

○中間発表会で学んだことを参考にして，これからどのような追究活動を進めていくか，追究グループで相談して書き留めておこう。

1	地域で龍ヶ崎の行事をきとわる。
2	城西中生徒がどれだけ龍ヶ崎の行事に参加しているかをきとわる。
3	

(ｳ) 学習を広げる再追究活動

再追究活動の段階では，中間発表会の中で感じた疑問や新たな課題について調べ直していった。

具体的には，再度文献にあたって付け足しをする生徒，聞き足りなかったことをゲストティーチャーへ手紙を出して調べる生徒，実際に撞舞を見学に行った生徒，牛久沼の自然を撮り続けている写真家のところへ聞き取り調査に行った生徒がいた。夏休みを利用しての活動のために十分に活動できない場面も見られたが，自分たちの力で準備し活動することができたことに驚きを感じていた。

このように，追究の中から感じた必要性やこだわりをもって，地域社会に主体的にかかわっていくことで，地域の一員としての自覚や自分たちの手で龍ケ崎に残された伝統や文化を守っていこうとする意識を高めることができたと考える。

4　研究のまとめと課題

(1) 小学校の実践から

○　戦争に関する遺品や写真の観察，博物館での見学，戦争経験談を編集したＶＴＲの視聴など，子どもが五感を通して戦争という歴史的事象と直接的，間接的にかかわれるようにすることによって，子どもの内面に疑問や問題意識を醸成し，それによって，子どもに，「どうしても調べてみたい」「調べずにはいられない」という問題解決への切実性をもたせることができることが分かった。

○　近現代の歴史的事象を取り扱う際に，子どもが追究活動の中で，歴史的な文化遺産とのかかわりだけでなく，生きた人とのかかわりをもてるようにすることによって，意識の遠くにある歴史的事象を身近に感じさせることができる。また，子どもの身近にいる過去の歴史の体験者の言葉や態度は，当時の人々の生活への共感的な理解を促し，調べた結果としての歴史的な知識ではなく，子ども自身が自分を当時の状況に置いて考えたり，現在と比較しながら考えたりと人間（自分）という視点から歴史的事象をとらえられるようになることが分かった。

(2) 中学校の実践から

○　選択社会の課題設定場面で，生徒が自分たちの住んでいる「地域のよさ」について意見交換をし，自分たちの身近な地域の事象や生活経験に目を向け，自分とのかかわりを深めることによって，それまで知っていると思っていたことが覆されたり，自分の思考や判断にとまどったりすることによって，自分なりの学習問題がもてるようになることが分かった。

○　ゲストティーチャーを交えた意見交換や様々な人とふれ合いは，生徒の心を刺激し，それまでの学習で得た知識や自分の考えを問い直したり，社会的事象に対する見方や考え方を深めたりすることにつながることが確認できた。

(3) 今後の研究の課題

①　感性のとらえ方が，まだ一般的であり，社会科の学習において活かされる感性とはどのような感性なのか，実践を踏まえながら明確にとらえていく。

②　子どもの感性的なとらえ方が，社会的な知性としてどのように身に付いていくか，学習過程を追いながら，事例的に明らかにしていく。

(註)

※1　『２１世紀を展望した我が国の教育の在り方について』文部省　1996　P.26
P114 図表13 現在の青少年　P118 図表20 登校拒否児童生徒数を参考にした。

※2　前同書　PP 20-21

※3　「心を育てる学級経営別冊一第３号一」1999　P.24
皆川興榮は，この中で，感性を　①美的感性，②知的感性，③人格的感性の三つに分けている。

※4　『広辞苑』

※5　増山　英太郎　『感性はどうしたら磨けるか』ごま書房　1989　P.30

※6　三澤　義一　『感性を触発する文学の授業』

※7　現代教育学大事典　第一法規

※8　片岡　徳雄　『子どもの感性を育む』　日本放送協会　1990　PP 74-75
渋谷　憲一　「教育展望　９月号」教育調査研究所　1994　P.46

※9　小学校指導資料『新しい学力観に立つ社会科の学習指導の創造』文部省　1993　P.28

※10　「豊かな感性を育てる学習指導」茨城県教育研修センター　1998